

筑波山頂から日本の英学を展望する

赤祖父 哲 二

1

筑波山には三回ほど登った。いや、ケーブル・カーに乗っていき、山頂から下界を見下ろしたことがある。残念ながら眺望は麓の学園都市どまりであって、関東平野を一望することはできなかった。天気の子ばかりでなく、視力のせいだった。遠景と近景が同時によいというわけにはいかないらしい。ジェット機からは箱庭のような景色がよく見えるけれど視野は狭い。宇宙船からなら関東平野全体は見えても細部はだめ。社会の動きや時の流れも同じである。日本の「英学」全体を眺望するのが本誌の任務だと考え、表題のように大きく構えてみたが、思うようにいかない。富士山からでも変わりはないだろう。ともかく、以下が目をごらした顛末である。

いったいなぜ日本の「英学」の展望がきかないのだろうか。インターネットを駆使するアメリカ経済のひとり勝ちによって、英語がグローバル言語になりつつあるというのに、どうしたことか。英語を日本の第二公用語にせよとか、小学校から英会話を教えよというご託宣が政府筋から下されたが、とくに熱気があがったふうはない。教育ママが走り出したというニュースも聞かない。新聞にあるように、日本全体が閉塞感に陥っているのだから、英学だけが先行き透明というわけにもいかないだろう。

まず、歴史的考察、つまり英学のはじまりから考えてみよう。英学を明治以来の公教育制度、すなわち国家が教育に責任と権限をもつ体制のなかに置いてみると、この制度が何やら金属疲労を起こしているという感がつよい。公務員試験の成績が配属や昇進において一生を支配するような縦割りの閉鎖社会が元凶であるらしい。大学の法学部がその頂点にあって全体を支配してきたのである。この制度は西欧からの輸入であったが、伝統的なムラ意識に支えられて生き延びてきた。国は滅びても、自分の属するムラ（部局、派閥、会社、学系な

ど)は巨人軍のように永遠に不滅なのだ。

「近代化」したつもりが、叙勲制度がまだ残っているように、大化改新の古代はまだ生きている。純粋な「近代」などという理念型は西欧でも現実にはどこにもなく、それがあると思いこんで焦ったのが日本の悲劇だった。文化・文明の輸入は強烈な細菌の進入に似て反動を呼び抗体を作った。ムラ意識や天皇制がそうである。西欧から仕入れたものは「富国強兵」、今日の言葉でいうと「軍事大国」つまりは植民地支配であり、学問はそれに奉仕すべく要請された。

英学についていえば、「仏学」や「独学」と並び、英独仏三国の書店を張って競い合ってきた。昔は学者や学生の体臭にまで英独仏の違いが感じられたものだ。そして、日英同盟のおかげで、英学が西欧文明翻訳の主流をなすに至った。日米戦争後には「米学」色に染まるかと思いきや、かならずしもそうではなかった。アメリカ学には「米学」といわれるほど個性はない。

明治初期に戻ると、当時の教科書はほとんど外国産であり、岡倉天心、内村鑑三、新渡戸稲造らの「国際派知識人」が生まれたのは、ひとつには今に言うイマージョン(浸透・洗礼)教育を受けたためであった。ところが、たちまち日本語で書かれた教科書が小学校から大学までいき渡り、「お雇い外人」にお帰りを願ひ、西欧文明の翻訳を国是とし、英語教育も英文和訳を基本とするようになる。これは漢文訓読の長い伝統の応用・継承であった。

ラフカディオ・ハーンを首にし夏目漱石を採用した東京大学もしくは文部省の方針が、そのような広義のナショナリズムを象徴している。ところが、漱石は英文学の研究など男子一生の仕事にあらずと思ったのか、その前途に見切りをつけたのか、やがて作家の道を選んだばかりか、その後、博士号を授けるといふ文部省の申し出を足蹴にする。「バカセにはなりたくない」と言わんばかりであった。また、赤門には「尊敬に値する教授や博士が穴籠りをしている」などと同僚たちを穴熊呼ばわりまでしている。彼は「文学論」において、外国文学を学ぶことにどういう意味があるかと真正面から立ち向かったのだが、この仕事を穴熊たちに譲ることになる。だが、穴熊たちはそんな野暮な問いはダサイとばかりに無視したのか、もっぱらイギリスが第二の故郷であるかのように、たとえばワーズワースの英詩に随喜の涙を流すようになる。これは李白や杜甫を愛した先人にならったまでのことであった。

むろん、英詩であろうと漢詩であろうと、何らかの普遍に訴えるからこそ随喜の涙を誘われるのだが、何が普遍なのか絶えず問いかけを怠るとき、そこにマンネリと退廃が起こる。教壇の上でかのヒース咲く荒野に思いをはせ感涙に

むせぶだけで生涯が保証されるとは、何と恵まれていたことか！私はこの幸運に唾することがいかに罰当たりであるかわかっている。けれど、世間はもうそんな余裕を許してくれない。今や「教養」は地に落ちてしまった。これは主に十九世紀の西欧学に依存した教養であって、西洋に近づきうる少数派の知識層が模範を垂れてくれた。だから、表層踊りであり、化けの皮もはがれやすかった。本家がTVブンカに犯されると、こちらはそれに輪をかけて俗悪化した。

野暮な問いかけをしなくてはならない。英語の訳読方式とは何であったか。このお陰で日本はインドやホンコンのような植民地にならずにすんだと喜んでばかりはいられない。事態は入り組んでいて一刀両断とはいかない。訳読、とくに直訳によって、日本語がかなりの影響を受けたからである。「言文一致」は漱石、二葉亭四迷、山田美妙など外国語を学んだ文人やジャーナリストの努力によって進められた。そこで、次のように10の問いを掲げることにする。難問なので軽率な答えは出したくない。だが、だからといって問いかけだけで遁走するつもりはない。何らかの答えを示唆することにしたい。

(1) いったい外国語、とくに英語の直訳は日本語と日本人の思考方法にどのような影響を与えたか。たとえば、「何が彼女にそうさせたか？」という無生物主語のバタ臭い文体は、集団に埋没するといわれる日本人の心性を変え、いわゆる論理的思考を習熟させたか。明治維新から130年の今日、英語色は日本人の表層を染めただけに終わったか。

(2) 外国語と外国文化の影響を考える場合、言語と思考を区別するべきか。言語、とくに語彙や文構造がいくらか変わっても思考や心性の変化はきわめて遅いと見受けられる。いや、遅いどころか、ほとんど変化しないのかもしれない。それとも、日本語自体それが成立した万葉時代から根本的には変わっていないのだろうか。

(3) 現代の言語学はサピア・ウォーフの言語相対説とチョムスキーの深層構造説のどちらに軍配をあげるのか。それとも、両者の間で迷っているのか。無冠詞で単数形の language なるもの（言語そのもの、言語一般）は存在するのか。だいいち、「言語」の定義は何か。いや、言語一般は実在しなくても、個別の言語は特徴を誇示できるのか（英語なら英語の特徴・英語らしさとは何か）。

(4) 最近では「バイリンガリズム」の定義は幅が広い。外国語の受容も日常会話にとどまる場合と読み書きにまで進む場合では、どんな差を生むか。インドのようにバイリンガリズムが進んだ地域において、上着の言語と人々の思考

にどんな変化が生まれたか。あるいは、外国語に習熟しても、思考方法まで変わることはありえないのだろうか。論理の駆使や感性の練磨に、それ相応の訓練が必要であるなら、言語と思考は区別しなければならず、この場合、思考訓練はどのようなものになるか。たとえば、西欧語に基づく西欧型思考方式というものがほんとうにあるのか。それとも、人類に共通の思考論理があるのか。あるとすれば、それは「普遍文法」に依拠しているのか。

(5) 文章語と口語の差は何か。文章語は抽象度が高く、口語は日常生活に密着している。グーテンベルク印刷革命は論理の客観性を強化し、人間の思考に根本的な転換をもたらしたのか。最近のIT革命はさらにそれを加速しつつあるのか(西垣通「IT革命後の社会」〈中央公論〉2001年1月号)はそう主張している)。

(6) 日本語は江戸時代まで英語にくらべて「言文不一致」だったのはなぜか。日英両語に質的な差があるのでなく、首都の言語を中心にした共通言語の成立が早かったか、遅れたかの違いにすぎないといえるか。

(7) 明治以来の「言文一致」の場合、「話すように書く」ことがモットーとされたといわれてきたが、実は「書くように話す」という側面がより強かったとみられるふしがある。もしそうなら、外国語の翻訳によって日本語と外国語の中間に(ただし、真中でなく日本語に近い位置に)新しい第三の言語が生まれたといえないか。

(8) 人類の歴史はこのような第三の言語が次から次へと生まれた歴史ではなかったか。ゲルマン語も東から西へドイツ語、オランダ語、英語と並ぶが、これらはもともといわば方言にすぎなかった。中国語も純粋な中華民族(漢民族)の純粋な言語ではなく、東西南北から中原に離合集散した諸民族の血の混交によって生まれた商売用の単純な言語、いわばピジンあるいはクレオールとして出発し次第に成熟したという説がある。これは正しいか。

(日本語も南北両要素の混交説が有力である。高天原を思わせるヒマラヤあたりの高原に純粋な天孫民族がいて、これが渡来して大和民族になったという珍説があったけれど、これは純粋なアーリヤン民族がウクライナあたりの草原に発生して、その後あちこちに広がって現在の西欧諸民族になったというナチ神話のあやかりであろう。Aryanの語源がサンスクリットで「高貴な」であるから、語るに落ちるといえるものである。だから、インド・ヨーロッパ祖語説も限定をつける必要がある。言語系統樹も文構造でなく主に音声に基づいた分類にすぎないし、進化論へのイデオロギ的悪乗りではないか。複雑に張った根の部分を見出し枝の分岐だけを強調し

ている。大根のイメージに基づいているのか。ヨーロッパとアジアの中間地帯は諸民族交通の十字路であり、相互影響と混交の舞台であった。単純から複雑への拡散というよりも、多岐の拡大再生産であったのではないか。英語も同じく七つの海を支配し商才を発揮したイギリス人にふさわしく、簡便で文法がうるさくない言語として成長し、今日のグローバル化の基礎をなしたのか。それとも、それは大英帝国とアメリカ合衆国の覇権によるのか。

(9) 複雑な民族事情をかかえるアジアとアフリカの旧植民地では、共通語として英語やフランス語が大きな役割を果たしている。文学作品も英語やフランス語で書かれている。この英語とフランス語は本国のそれと、どんな違いが生まれているか。土着化したか。単純化されているならば、将来はどうなるか。

(10) こうして、改めて言語と文化の関係について問わなくてはならない。まず、言語というより英語の定義。英語という言語のイギリスらしさ(英語らしさ)とは何か。モダン・イングリッシュの成立に至るまでの曲折を考えると、大なり小なりクレオール性が目立つ。アングロサクソン祖語、ノルマン・フレンチ、ラテン語に加え、スコットランド語、アイルランド語、ウェールズ語の混交(ハイブリッド)はどうだったのか。「らしさ」は「らしさ」という幻影にとどまるか。

「文化」というキーワードも、英語、仏語、独語など民族語という概念と同じく、十九世紀に高まった民族国家風の幻想だという感が強いのではないか。「文化」概念は日常生活全般にまで拡大定義されている。たとえば、料理法についていうと、日本料理、フランス料理、イタリア料理、中華料理のなかから純粋な日本性、フランス性、イタリア性、中国性を抽出できるだろうか。できるとしても、それらは国民性と関係をもつか。独特の料理法がないイギリスやドイツやアメリカについてはどうするか。悪くいうと、文化や国民性に関するナショナリズムは自己宣伝と自己欺瞞の旗だったのではないか。言語や文学の研究からその旗の色合いは除かなくてはならない。もちろん、「らしさ」には幻影の色が濃い。100%これを除くのは、体験がこれを認めない。いったい英語らしさは、話す口調やジェスチャーか、それとも語彙や文法構造か、思考法によるのだろうか。

以上をもっと生々しいエピソードに集約してみよう。シドニー・オリンピックに出場した選手のセリフ、「すいませーん！」と「弱いから負けた」のような日本語は、周囲に気配りする日本語独特の「ニュアンスに満ち満ちた」言語であり、これにくらべて英語は「ニュアンスというものの希薄な汎用的言語」

であって、だからこそ世界に商売用として流通したという見解が作家から出されている（関川夏央「『世界』とはいやなものである」『中央公論』2001年1月号）。この作家はついでに船橋洋一の「英語第二公用語論」に賛成している。（「すいませーん!の複雑なニュアンスとは、こうだと当の作家は勘ぐっている——「本音は銀メダルで嬉しいのだが、嬉しがっては国民のみなさまに申し訳ない」）。

このような自虐と宿命観に満ち満ちた見解をどう考えるか。坊主（外国人）憎けりや袈裟（外国語）まで憎いのか。それとも、「アングロ・アメリカ文化に染まることなく、国際コミュニケーションの手段として英語を使用するという根本姿勢が、今後トランス・ナショナルな公共哲学を發展させる上でますます必要」で可能なか（山脇直司「ハーバード・フォーラム「地球時代の公共哲学」を終えて」『UP』2000年12月号）。手段と思想は切り離せるか。山形弁のTVタレント、ダニエル・カールが、「『平成維新』の日本には、英語の思考回路が必要です」（朝日新聞、2000年12月7日夕刊）とおっしゃる昨今である。英語をベラッとしやべれば、「英語の思考回路」とやらが自然に身につくと思っているらしい。日本語で論理的に考え議論できない者が、どうして英語でそれができようか。すべてはこの一言に尽きる。

2

以上が私の基本的な問いかけである。以下、さらに敷衍していきたい。民族の自己宣伝・自己欺瞞といえ、アーリヤン神話に似て、西欧文明の「源流」としてエジプトやメソポタミヤの文明、さらにはギリシア・ローマの文明を排他的に抱えこんだことをあげなくてはならない。とくにイギリスとドイツでは、十八世紀頃からギリシア・ローマの「古典学」を教養の基本に据えて人文学の方向づけをし、イギリス十九世紀の文学批評家マシュー・アーノルドは、「カルチャー」の定義を古典学中心におこなった（「古典」というだけで、ギリシア・ローマのそれをさすこと自体が権威を示す）。ドイツ人は西欧つまりフランスに対抗して、ローマを通り越してギリシアと直結しようと哲学志向を強めた。これはドイツが古代末期にローマ文明の影響が強くなかったことの後遺症である。ドイツ人の純血好みが観念性を強めたのか。それともその逆かもしれない。これにたいして、イギリス人の血と文化のハイブリッド性が経験論への傾斜をもたらしたのか。

ともかく、特定の文化・文明を私有化することは、歴史の捏造のはじまりと

なる。石器の捏造ならバレやすいが、「精神文明」の我田引水にはだまされやすい。ともかく、すべての文明は混交の産物にはかならない。奇妙なことに、エジプトとメソポタミヤの文明を西洋文明の「源流」と呼びながら、サッカーのアジア選手権試合が示すように、今ではこの地域をアジアに区分しているのはなぜか。そこがかつてイスラム圏に入り、西欧とさまざまな軋轢を生んできたためであろう。中華思想も似ている。北方系と南方系の混交で中原に国ができると、やがて自分たちの出自を忘れるか無視するかして、後から侵入してきた民族を蛮族視し、みずからを「中華」と呼んで誇示した。アテネやスパルタという都市国家を作った古代ギリシア人も、北方から侵略してきて巨人族を征服したアカイア人という「野蛮人」（トインビーの呼び方）であった。

私はかつて日本の「古典学者」から「英文学などは成り上がり学問だ」と言われたことがある。たしかに、文学研究といえば古典学だけであったイギリス本国で、英文学の研究と教育が大学で本格化したのは、漱石の留学以後のことであった（第一次大戦後という説もある）。日本で英文科創設が早いのは、先取り縦割り輸入という特技のためであった。だが、日本の古典学者が英文学成り上がり説を唱えるのは、目くそ鼻くそそのたぐいであるし、虎（イギリス、ドイツ）の威を借りるとは片腹痛い。しかも、その子虎は猫にすぎなかったし、ギリシア・ローマが大虎であるかどうか、猫のクチマネでなく自分の目で確かめなくては。

さて、英学にしる何学にしる目標が必要である。目標というものは効用が怪しくなるとはじめて、必要性が実感されるのだが、明治・大正・昭和の先人たちはそんな悩みに無縁であり、ただひたすらゴツゴツと翻訳したようにみえる。ところが、現代の日本人は経済で追い越し、老若男女こぞって憧れのパリやロンドンやローマを見聞し、やがで慣れると拍子抜けしてしまっただらう。GDPでアメリカも追い抜き、ニューヨークの高層ビルを買収取って敗戦の屈辱を晴らしたつもりになっても三日天下にすぎず、気がついてみるとアメリカのIT革命とやらにまた追い抜かれて、茫然自失のていたらくである。そのうえ、高齢化と若者の荒廃という虎と狼に挟み撃ちされている。国の未来図こそ肝心なのに、これを描いて国民に選択を迫る者がいない。世界最大級のゴミ生産国と飽食大国でいつまでもあり続けるのか。いつまでも景気、景気と叫び続けるのか。国家の威信を唱える者は、生きるか死ぬかの問いは知らぬ顔で、過去の亡霊を呼び覚ますことに熱心である。

私は廃墟のなかから立ちあがった敗戦直後のことを思い出す。ナチスの蛮行

が西欧文明の帰結かと疑われたけれど、それでも「インヒューマン」は「ヒューマン」の例外か突然変異だと信じ、人間理性の尊厳を高く掲げた西欧学に期待をかけた。今ではその期待も薄れてはきたが、西欧学の本質がインヒューマンだったなどと意趣返しするつもりはない。それよりも、こちらの受容態度のほうこそ問題である。だが、だからといって、すぐ「日本」や「東洋」の出番を求めたりしない。

大言壮語で口が張り裂けそうなので、英語に論をしぼることにしよう。まず出発点として、「言語すなわち思考とコミュニケーションの道具」説を考えてみたい。ただし、この「道具」は出来合いの製品としての道具ではない。刀鍛冶の名人芸に頼ってはいけない。言語はそういう道具ではない。みずから鍛錬しながら使いこなしていくべき道具にはほかならない。したがって、ここでの「道具」は、「ツール」万歳のインターネット路線や流行の英会話路線でいう道具ではない。また、この道具は部分的には身体と融合していて、金槌や刀が身体のだこかの延長だというような単純化を許してくれない。

さらに、「言葉は存在のすみかだ」という哲学者のお墨付きとも、また「言語こそ文化の精髓だ」と「言語こそ民族の精髓だ」を結びつける民族派とも一線を画したい。「民族文化」という得体の知れぬ幻想にこだわると、宝捜しに夢中になり「開けゴマ」という呪文にとりつかれ、洞窟に閉じこめらるのがオチである。何も日本と日本語に誇りをもたなくていいと言うのではない。偏狭な大義名分はもういい。誇りをもつべきは、この列島に生きた人々の血と汗にまみれた体験である。言語や文化を神秘的な実体にしてはならない。

同一言語圏の内部でも50キロ過ぎると、模倣のむつかしい「方言」があらわれるといわれている。これは口調やジェスチャーや表情と思考や心情が不思議に合体しているので、体感はいくらか可能でも分析は不可能となる。狭いヨーロッパでは16世紀以降、英語、オランダ語、ドイツ語などが方言（ヴァナキュラー）から国家語として自立する。むろん、それぞれの内部でまたいくつにも分かれていて、やがて特定の方言を中心に「標準語」がまとまると、それらは方言（地方語）として差別されたのである。厳密に言えば、同一言語あるいは民族の内部にさえ複雑に分岐した宗教、心情、風俗習慣を抱えているのだから、民族文化という場合の「文化」は実に粗雑な概念語だということがわかるだろう。この「カルチャー」も「シヴィリゼーション」も十九世紀に台頭した民族国家と西欧自讃のイデオロギーを注入された語であって、キーワードに不向きである。

言語とは水面上に見える氷山の可視部分なのか。それとも、音声と文字からなるネットワークなのか。いや、この比喻は実体にこだわり過ぎている。言語が脳シノプス線状突起の分泌する化学物質に媒介される電気の働きだとすれば、目に見えない活動（エネルギー）だということになる。ただ、この働きの実態はまだほとんど解明されていないし、大脳生理だけに終わらない。

英語を例にとると、古英語から中世英語、それから近代英語へと激しい転換を遂げつつ、世界中の言語から語彙を吸収し、ハイブリッドの見本にさえなっている。もちろん、純血のゲルマン種だとナチが誇ったドイツ語も同じであった。だから、「英語らしさ」「ドイツ語らしさ」を分析的に抽出できるわけではない。ただ、ドイツ語の長たらしい語にへきえきしたり、音声の重苦しさに北海の霧を連想することはできる。当然これははなはだ主観に偏するが。

要するに、「英語的思考」「日本語的思考」なるものを誇大に宣伝してはならない。「的」を「らしい」の意味だとすれば、「イギリス人らしい考え方」と「日本人らしい考え方」の相違はたしかに存在するにしても、これを言語と直結して大騒ぎするのは誤っている。言語はきわめて柔軟なネットワークである。だから、あるセンテンスを別の言語に直訳して思考方法の比較をするのはきわめて危険な、しかも噴飯ものの作業となる。「何もありませんが、どうぞ」と日本人は言うが、**nothing** は食べられないじゃないとか、「申し訳ありません」と日本人は言うが、言い訳しないという意味だから傲慢不遜もははだしいと怒るイギリス人がいる。ある回路が英語にあって日本語には存在しなくても、またその逆であっても、全体としてはどこかで補いがつけられているはずである。ウォーフの「標準的平均西欧語」(SAE)ほどイデオロギー的な主張はない。アーリヤン神話を連想させる。

残念ながら、こちらでは日本語は自己と他者の呼称が変幻極まりなく公共性に欠ける言語だといった日本語特異論がまだ相変わらず出回っている。ねじまがったナショナリズムは万病のもとである。日本語は「なる」言語、モノログ言語、英語は「する」言語、ダイアログ言語だという一見科学的な形而上学的言語文化論もすたれていない。日本人は自然性を尊重するが、西欧人は自然を征服するといった念仏に自己満足しているうちに、日本はグローバル経済で負け自然は破壊し尽くされ、英語が第一公用語に（日本がアメリカの準州に）ならないともかぎらない。武士は自虐的甘えを潔しとしない。だいいち、日本文化論で第一、第二の敗戦や環境破壊を阻止できたらうか。

何も私は日本語が今のままでいいとか、万邦に比肩する言語だなどと主張し

たいのではない。言語決定論は言語なるものを実体視し固定化し動きのとれないものとしてとらえるところから発している。もし日本人の思考に欠陥があったとしても、これを日本語の責任にするのは間違っていると私は考えるだけだ。責任転嫁も自虐的甘えの一種にほかならない。欠陥はあるなら直さなくてはならない。たとえ使っている道具に欠陥があっても、これを鍛え直せばいい。さらに、欠陥は長所と裏腹である。短絡思考こそ敵であろう。

百歩譲って「イギリス人らしい思考」のほかに「英語らしい表現」があると認めたとしても、「らしさ」はあくまで「らしさ」に過ぎない。だが、このように相手の特徴らしきものについて余裕をもって相対視できるのは、外国語と母語の両方を見直すことができるようになった証である。すると、この両方の「らしさ」の幅広い中間に自家用のハイブリッド種を想定できるようになる。そして、この幅広い中間の左右両端、つまり外国語と母語の習得は死ぬまで続くから、中間の幅も拡大し続ける。もっとも、たとえ母語であっても習得は完璧にはなりえない。個人がその母語集団の歴史的蓄積の総体を完璧に習得することなど不可能である。実際は脳細胞が老化し途中で頓挫するのだから、習得はいつそう不完全となる。だから、かえってボケも祝福となる。死ぬまで学習ではクタビレル。

近代の日本語についていえば、明治の先達たちは、その中間に「言文一致」というあまり正確ではない呼び名の第三の言語を作った。この功罪を決めつけるのはまだ早い。試行錯誤は今なお続行中だからである。ただ、明治における試みのなかで大きな位置を占める二字漢語の観念語・抽象語の製作について、指摘しなければならないことがある。たとえば、「哲学、社会、恋愛、権利」のような新語、「観光、自由、文学、自然、文化、文明」のような再生語は西欧からの輸入キーワードを見事に翻訳し大きな貢献を果たしたのだが、定義があいまいのまま西欧文明の栄光を担って使用されてきた点では、思考の徹底化を阻害する働きをしたといえる。むろん、これはそういう語彙そのものの責任ではない。これを使ってきた日本人のアイマイ好み・徹底した議論からの逃避癖のせいであって、これに甘んじているかぎり、日本に未来はないといえる。

試行錯誤を大胆に続けなくてはならない。これを試みている若い作家が出現している。「ドイツ語がぺらぺらになりたいというのではなく、何かふたつの言語の間に存在する〈溝〉のようなものを発見して、その溝の中に暮らしてみたいと漠然と思っていた」作家である（多和田葉子「カタコトのたわごと」）。

幼児のときからイギリスに定住したカズオ・イシグロのようなネイティブ・

スピーカー同然の場合とちがって、この作家は大学卒業後にドイツに住みつき、ドイツ語でも作品を発表し文学賞まで獲得した異色の存在である。もっとも、ドイツ語が母語でないのにドイツ語で書く作家が400人もいて、自作朗読会や討論会に読者を集めているというから、このほうが驚きをさそう。しかも、そういう作家を育てようとする意欲が国にも地方自治体にもあるという。アーリヤン人種の純血を叫んだナチの昔からは想像もつかない現象である。

それにしても、ドイツ語と日本語の間にある「溝のようなもの」とは何であろうか。まさかコンクリート製の深い水路に落ちた犬が這いあがろうとあがれないといった比喻ではないだろう。この作家は「美しい日本語」なんてものは信じないどころか、日本語が一度は崩れないといけなく考えていたという。まず「ドイツ語で頭の中で文章を考え」、それを日本語に直したらしい。はじめのドイツ語が「変なドイツ語」だったので、「溝」が発見されたということが重要である。「溝」から生じた具体例はこうである。「ききちがえる」という言葉を口に出すと、蛙の一種に響き、「未知蛙」や「夜道蛙」が「蛙街道に一列に並ぶ」という。（「孢子」「光とセラチンのライブチャッピ」）

これは駄洒落ではない。宮沢賢治を連想させる。もっとも、こういうことはパソコン操作中によく起こる。「英語」への変換キーを押し忘れて英語を書くときである。「溝」とは二言語を相対視できる場所を意味する。次の証言を噛みしめてみよう。「言葉は穴だらけだ。日本語でも他の言葉でも、外から眺めてみると、欠けている単語がたくさんあって、どうして、こんな穴あきチーズを使ってものを書くことができるのだろうと不思議になる。もちろん、いつもその言葉だけ使っていれば、そんなことは気にならない。穴は、外部に立った時にしか見えない」（「ふと」と「思わず」【カタコトのうわごと】）

この作家は「ふと」と「思わず」をよく使っていたが、カフカがこれに相当するドイツ語でなく別の表現であらわしているのを知り、連発するのをやめたという。ただし、この作家は指摘していないけれど、「穴」は語彙だけでなく、思考や発話そのものに存在するにちがいない。

最後にもう一つ。先に私は言語が鍛えながら使う道具だと述べたけれど、言語は中立で透明な媒体ではないし、イデオロギーと権力がつきものだ、と反論されるかもしれない。たとえば、英語を習うと「英語帝国主義」に汚染されると非難する向きがある。まさに「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」であるが、私はそれなら洋服やパンツを脱げばいいなどと反論はしない。言語道具説に代わって言語衣装説などという妙な議論に発展しては困る。比喩遊びはやめて、

インド人や在日朝鮮人の人たちやユダヤ人の苦悩に思いを寄せなくてはならない。問題は新しい語彙や文体を創出したかどうかというよりも、その苦悩がどのような新しい思想を生んだかということである。時代の思考パラダイムを転換させた思想家にユダヤ系が多いのはなぜか。英語を強いられたガンジー、ラテン語で書いたスピノザ、ドイツ語で書いたマルクス、フロイト、ベンヤミンの例をあげるまでもない。